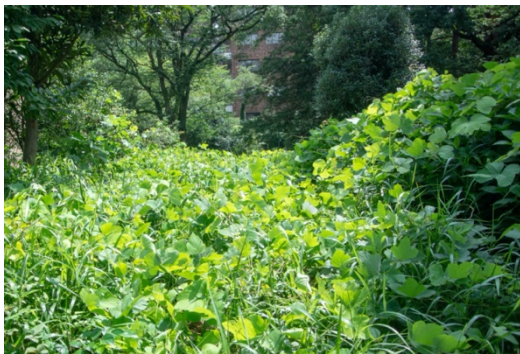


一橋大学構内の野草について

前回は大学構内で春に花をつける草本類を紹介しました。大学構内の野草といわれるものには、増えて困るものも少なくありません。また、ふと、草むらの中を見ると美しい花をつけているものもあります。様々です。今回は、夏から秋にかけて著しく繁茂し私達が悪戦苦闘する蔓植物について話をしましょう。

蔓植物は草本のものも木本のものもあります。茎や幹を作り植物本体を支える代わりに、他の植物や支柱、建物・構造物などに依存しながらいち早く日光の当たるところに出て、葉を広げて光合成を行う植物です。これらの植物には、蔓を絡ませるもの、気根を出して他の木に付着するもの、葉の変化したヒゲを巻き付けるものなどその生態は多様です。特に、葉を広範囲に広げ、樹木を覆ってしまう類の蔓植物は、覆われた植物の光合成を妨げその植物を枯らしたり弱らせたりします。大学構内では、クズ、ヤブガラシ、ヘクソカズラ、スイカズラ、サネカズラ、オニドコロ、ヒメドコロ、ヤマノイモ、カラスウリ、ノブドウ、サルトリイバラなど多くの蔓植物を眼にします。このような植物の中で一際目につき、私達が対策に苦慮するものにクズとヤブガラシがありますのでそれを紹介します。

【クズ】



クズは日本各地に分布し、東アジアから東南アジアに広く分布するツル植物で、マメ科クズ属の多年草です。分類上は、多年草ですが、年を経たものは木本といってもよいほど太くなります。根は長く、主根は長さ1.5メートル太さ20センチメートルになるものもあり、大量のデンプンが貯蔵されています。「クズ」の名前は、現在の奈良県吉野町の国栖（くず）が、蔓草の根から採取した澱粉の産地であり、その澱粉を「くずこ」といい、蔓草を「クズ」とよぶようになったといわれています。中国名は「葛」であり、現在は「葛」が名称として使われています。秋の七草の一つで、8月のおわり頃から9月にかけて、甘いブドウの香りのする房状の紫色の花（両性花）を咲かせます。葉はマメ科植物に特有の三出複葉で互生、大きな葉の裏には毛が密集しています。日当たりの良い林内、伐採跡地や放棄畑、道路端などに繁り、また痩せ地・荒れ地でも旺盛に生育します。盛夏には1日で1m程も伸びると言われるくらいに成長し、太い茎を伸ばして繁茂します。林業では植栽した樹木に巻きつき、葉を旺盛に広げて覆ってしまい、植栽木を枯らしてしまう害草です。繁殖力が強く根絶は殆ど不可能に近い植物です。





繁殖は種子からの発芽の他に、地上を伸びる茎の所々から根を出して株を広げます。不用意に刈り取ると、所々に残った株から再生し、かえって個体数を増やしてしまうことがあるので、きちんと根元から刈り取り個体を弱らせるか、落葉後の晩秋から早春にかけて根から抜き取ってしまうことです。種子は短期間で発芽するものと長期間休眠して伐採などによる森林破壊により日光など、気候条件が整った後に発芽してくるタイプがあります。ここにもこの植物が生き、子孫を残していくためのしぶとい生活戦略を見ることができます。

クズは多くの昆虫たちに愛される植物です。葉を切って運ぶハキリバチ、花を食べるシジミチョウ類、茎で汁を吸うマルカメムシやベッコウハゴロモ、葉を食べるクズノチビタマムシやコフキゾウムシなどゾウムシの仲間、花の香りに誘われてやってくるクマンバチなどなどです。昆虫たちの食餌となったり、花粉を運んでもらっています。

根に大量のデンプンが貯蔵されているクズにはいろいろな薬効があり、解熱、鎮痛、脳の血管の血流増加作用や血糖降下、女性ホルモンのような作用があり、発汗解熱効果がすぐれているといわれています。漢方薬に最も多く配合される薬草のひとつで、多くの人々が服用する漢方薬の葛根湯などに配合されています。このように、葛根は主に漢方処方葛根湯の主薬となり、葛粉からつくる葛湯は、風邪などの時に用いるとよく効き目があり、寒気や熱をとり、のどの渇きや下痢をとめるといわれています。子どもの頃、風邪をひくと母が葛湯を作ってくれたことが思い出されます。乾燥したクズの花(葛花:かっか)は、煎じて飲むことにより2日酔いの緩和に薬効があるといわれ、葉を乾燥して粉末にしたものに油を混ぜて外傷に塗ると止血効果があるといわれています。クズは、その新芽、若葉を摘み取り、熱湯で塩茹でして、あえもの、油いため、またクズの花は、塩ゆでして酢のものや天ぷらにして食すことができ、葛粉はくず餅、和菓子などにも利用されます。

クズは牛馬を飼育していた時代は貴重な飼料であり、刈り取られて持ち帰られたり、ツルは薪の結束に用いられたりした。茎の繊維からは葛布も織られ、根からの葛粉の採取など、それなりに利用価値の高い植物でした。私達が学内の緑の保全を目的に行う整備作業では、クズは実に厄介な雑草でしかありません。しかし、そのようなクズも私達の生活と密接に結びついていたことを知っておくことも大切なことであるように思います。クズが厄介者扱いされるようになったのは、私達の生活スタイルの変化にともなう里地・里山の崩壊に原因があるのかもわかりません。



【ヤブガラシ】

ヤブガラシはブドウ科ヤブガラシ属の多年草です。ネットで検索するとすぐに「ヤブカラシの駆除方法」などといった項目が検索画面上に沢山出てきます。夏の時期の生命活動の最盛期には、ツツジなどの樹木を覆ってしまい、それを除くに大変な時間と労力を要します。覆われてしまったツツジなどは、光合成ができなくなり枯れたり、弱ったりします。名の由来は藪全体を枯らしてしまうほどに繁茂することからといわれ、そのため林の所有者は貧しくなってしまうことからビンボウカズラの異名もあります。地下茎を張り巡らし、盛んに増殖することから、完全に駆除することはとても難しい植物です。ブドウの仲間の植物であるというのも意外です。



ヤブカラシは日本では北海道から琉球まで普通に生息し、東南アジア一帯にも分布します。葉は、複葉、互生で柄があり鳥足状に分かれ小葉は5枚あります。花は、7から8月に淡緑色の小花が多数平面状につき、次々と咲き、花弁とおしべが落ちて、橙色の花托が残り、秋には球形の果実が黒く熟します。この厄介もののヤブカラシも、漢方では「烏澱莓（うれんぼ）」とよばれ生薬として用いられ、乾燥した茎葉を煎じて服用することにより、利尿、鎮痛、神経痛、解毒などの薬効を得られ、打ち身、骨折、虫刺されには、酢と小麦粉で練り合わせて患部に塗布し、毒虫などに刺されたときは、生の根茎をすり潰して患部に塗布することにより薬効を得られます。また、若芽は茹でて、水にさらしあく抜きをすることにより、食用にもなります。



さて、この植物も昆虫たちの人気者です。6月から8月頃に5ミリくらいの小さな花が密集して咲きます。小さな花ですが、ツツジなどと異なり花の奥行きがほとんどないため、細長い口吻を持たない昆虫でも蜜を舐め取ることができます。そのため、ハエ、アリ、スズメバチやアシナガバチ、テントウムシなどの甲虫類、チョウを含む多くの昆虫類が蜜をなめるため訪花します。私達の作業中にもふと見たヤブカラシの花に、コアシナガバチと思われるハチが飛んできて一生懸命に蜜を吸っていました。これも厄介者扱いされるヤブカラシの見せた一面でした。

2020年9月24日 飯塚記